

体育の主体的な学びを導出する「環境的アプローチ」という視点

ー小学校 2 年生の授業場面よりー

木村夏希 （ 愛知教育大学 ）

1. 問題と目的

環境的アプローチとは、J.J. Gibson のアフォードダンスの考え方に基づく教育方法である。これに類似する概念にシグニフィアというものがある。今日、子どもにとって主体的・対話的で深い学びになるようにと種々の工夫が見られるが、かえって子どもの主体的な学びの機会を奪ってしまっている授業を散見する。これが本研究の問題意識にある。そこでこの問題に対して、主体的な学びを実現・損なう例を体育の事例から指摘し、これをアフォードダンス・シグニフィアという視点で批判する。以上が本研究の目的である。

2. 研究方法

事例検討と参与観察を行う。事例検討では、研究誌やウェブ上に発表された体育事例を、参与観察では、A 小学校 2 年生の体育授業を対象とする。（期間：2021 年 11 月から 12 月、10 回）授業を VTR 撮影する。撮影したビデオをショット分析により分析する。

3. 結果と考察

1) 主体的な学びを損ねている事例の批判的検討

小学校 5 年生ボール運動（サッカー）の指導案¹⁾では、攻撃側のみが入ることができるアウトゾーンがコートサイドライン際に作られていた。このアウトゾーンは教師の「サイドを使うと攻撃に有効である」という誘導が含まれたシグニフィアであると言える。サイドを使って攻めることの有効性は子どもが試合をかさねていく中で気付くことかもしれない。それをあらかじめ教師が設定してしまうことで、子どもが戦術を主体的に考える機会を奪ってしまっている。

2) 主体的な学びを促進する可能性のある授業場面の批判的検討



写真 1 肋木とマットで倒立をする子ども

写真 1 は肋木とその下にしかれたマットを使って倒立のような遊びをしている子どもたちである。このマットの使い方に担任の先生の指導は一切なかった。そのため、これは肋木とその下にしかれたマットが、子どもたちの倒立のような遊びをアフォードしたと考えられる。子どもたちのこれまでの経験から、マットには手を着くことができ、肋木には脚をかけることができると知っていた。その情報と与えられた環境から主体的に考え行動した結果であることがわかる。

4. 結論

環境的アプローチでの授業実践の方が子どもの主体的な学びを導出し、シグニフィアの視点では誘導的な学びを損なう点が示唆された。

5. 主な参考文献

- 1) 横浜市立小学校体育研究会ボール運動研究部：授業研指導案：2016：[ball soccer 5 2016 12 gaibu.pdf](http://city.yokohama.jp/ball_soccer_5_2016_12_gaibu.pdf) (city.yokohama.jp), (2022 年 1 月 25 日)